知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

November 2021 11

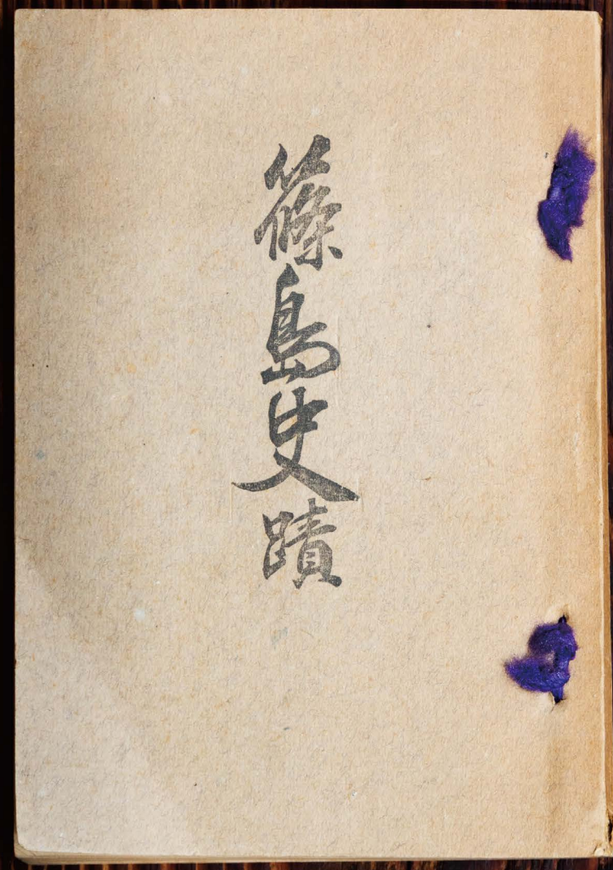
「史蹟の島」縁起

「史蹟の島」縁起

レジャーの島、グルメの島として人気を集め、年間を通じて
観光客が訪れる篠島は、多くの史跡が点在する歴史の島でもある。
島の歴史を彩る豊富な話題の中から、今回は
後村上天皇漂着という“大事件”をクローズアップする。

歴史的郷土誌を作った島の先生

古来趣味深き多くの歴史を有し、
名所旧蹟に富めること他にその比を見ず。
（出村鋏「篠島史蹟」総論より）



いま、篠島のキャッチフレーズといえば「おんべ鯛とふぐの島」だ。おんべ鯛とは伊勢神宮に奉納するために島民が調製する干鯛のことで、島の周辺では身の引き締まった活きのいい鯛が獲れる。ふぐも篠島を代表する魚で、他にもシラス、カキ、アナゴ、渡り蟹など島で水揚げされる魚介類の多様さ、豊富さは今さら言うまでもない。海の幸に恵まれていることを簡潔に表現したこの文言は、多くの旅人を惹きつける。

一方かつての篠島は、グルメ以上に歴史と景観を売りにしていた。表紙の絵は、大正十四年（一九二五）に発行された「南知多遊覧」のために吉田初三郎が描いた島の鳥瞰図だが、この観光案内には篠島の紹介欄に「東海松島と篠島の史跡」の見出しが躍り、大小の島々が織りなす絶景と、島内に点在する史跡の数々を旅情たっぷりに紹介している。後発の案内図やガイドも同様で、海の幸を全面に押し出すようになったのは比較的最近のことだ。

そんな歴史の島を初めて広く世に紹介したのは一冊の本だった。タイトルは「篠島史蹟」。初版発行が大正十年（一九二一）で、歴史、文化、名所旧跡、地理気候、産業経済、風俗風習など、篠島のあらゆることが盛り込まれ、頁数は一〇〇ページを超える。戦前の知多半島で、これほどボリュームのある市町村単位の郷土史誌が刊行された事例は少なく、先駆的な本だった。本書は四十年ほど前に復刻されており、知多半島の多くの図書館に置かれているので、興味のある方はぜひご覧いただきたい。

驚くべきことに、この本はたった一人の手によって書かれた。著者は篠島小学校で校長を務めていた出村鋏（たもつ）。幕末の万延元年（一八六〇）に西尾で生まれ、明治十一年（一八七八）から大正五年（一九一六）まで、途中数年間の島外赴任を挟んで四十年近くにもわたって篠島の子供たちに教育を授けてきた人だ。退任後も島で暮らし、死去したのは七十五歳を迎えた昭和五年（一九三〇）なので、もはや存命時の〝出村先生〟を知っている島民はほぼいない。いわば「伝説の郷土史家」である。

昭和四十四年（一九六九）発行の郷土研究誌「みなみ」第八号に、折戸耐次氏が出村先生の回想記を寄稿している。それによると「古武士の風格」があり「にっこり微笑されるだけで快よいしたしみを与えて人を惹きつける魅力」にあふれた人で、子供からも父兄からも敬愛されていたという。おそらく出村も赴任以来、島の人々に魅了されていたのだろう。島民との付き合いが深まり、島のことを知るにつれ、篠島の全てを世間と後世の人々に伝えたいという思いが募り、本書を構想したに違いない。五十六歳の時に刊行を果たすと、「これで、いつこの世を去っても思い残すことはない」と呟（つぶや）いたという。出村にとって「篠島史蹟」を世に出すことは、生涯の一大事業であったのだ。

出村が後の人々に与えた影響は大きかった。「南知多遊覧」の鳥瞰図で島の史跡がクローズアップされ

表紙、扉、P04に掲載した資料は、いずれも南知多町教育委員会所蔵

たのは、出村によって篠島で史跡顕彰の機運が高まったことがひとつの要因だろう。戦後間もない頃には、まだ生活物資が乏しかったにも関わらず、歴史や文化を紹介する小冊子「篠島シリーズ」が六冊発行されている(扉写真)。また、前述の折戸耐次氏は篠島の人で、南知多町誌(昭和四十年版)刊行の発起人の一人であり南知多郷土研究会(「みなみ」の発行元)の初代会長を務めている。折戸氏をはじめとする南知多の人々は、出村から大いに刺激を受けたのである。

親王、篠島に漂着す

その「篠島史蹟」でかなり多くのページが割かれているのが後村上天皇の篠島漂着だ。後村上天皇は南北朝時代の一三三九~六八年に即位した南朝の天皇で、まだ義良親王と称していた延元三年(一三三八)に、篠島に滞在している。

親王が篠島に流れ着いた経緯と島での暮らしをかいつまんで紹介しよう。

＊　＊　＊

そのころ天皇家は、二つに分裂して覇を争っていた。一方は、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇の南朝。もう一方は、後醍醐天皇から離反した足利尊氏が擁立した光明天皇の北朝。京都で室町幕府を開いた尊氏と北朝の勢いは凄まじく、南朝を率いた有力武将の北畠顕家や新田義貞を倒し、南朝は劣勢に立たされた。そこで後醍醐天皇は態勢を立て直すべく、親王(天皇の子供)たちや残された武将を全国各地に派遣し、それぞれ兵を整えたら再集結して京を奪還しようと計画する。

その意を受けた第七皇子(第八皇子とも)である義良親王は、陸奥国に下ることになった。そのとき親王はまだ十歳。南朝の拠点の吉野から伊勢まで行き、後醍醐天皇配下の北畠親房とともに北へ向けて出航した。ところが遠州灘に出たところで、台風に遭遇してしまう。激しい風雨に晒されて沖へ沖へと流され、義良親王の船ももはやこれまで…と諦めかけたとき、突如として風向きが変わった。この風に乗った船は、気が付くと砂浜に打ち上げられていた。そこは、三河湾に浮かぶ篠島だった。

驚いたのは島民たちだ。難破船に乗っていたのは天皇の御子というから、島始まって以来の一大事である。とりあえず島の神主宅に留まってもらい、しばらくして島の北東に聳える「東山」の頂上にあった城を修繕して行宮(親王の仮住まい)を整えた。また、山麓に北畠親房ら臣下の住まいも設えられた。

行宮の難点はそこに水場がないことだったが、後日、親王と親房の一行が島の中を散策していたところ、島の北に位置する照浜の近くの木立の中に、水が湧いているのを見つけた。飲んでみるとたいへんおいしく、親王は井戸を掘るよう命じる。以後、島人は日々この水を汲んでは行宮に運び、親王も島人にこの井戸水を使うことを許した。

親王は約七か月間篠島に滞在して吉野に戻った。南朝を統べる後醍醐天皇は、親王が戻ってから程なくして病に倒れ崩御する。譲位された義良親王がその後継となり、後村上天皇として即位した。やがてその報が島にも届き、島人たちはゆかりの井戸を「帝井」と呼ぶようになった。

＊　＊　＊

その帝井は、篠島の史跡の代表格として観光パンフレットでも必ず紹介されている。井戸は大きな屋根で守られ、今も絶えることなく水が湧き出ている。

神風ヶ浜と篠島聖蹟

義良親王一行が風に乗って流れ着いたのは、篠島の東海岸である。約八百メートルにわたって緩やかな弧を描くその美しい砂浜を、島の人は「前浜」と呼ぶ。古来、篠島の湊は風の影響を受けにくい島の北側にあったが、伊勢から見ればこちらが島の前側だ。海水浴場としては「前浜サンサンビーチ」という愛称があり、島外の人にはこの名の方が馴染み深いかもしれない。

しかし、表紙の初三郎の鳥観図をよく見てほしい。ここには「神風ヶ浜」と記されているのだ。出村の書いた「篠島史蹟」には、以下のように説明されている。

無事だった親王を迎えに訪れた南朝の勅使に、島の神主は事の顛末を語った。それを聞いた勅使は「無事だったのは伊勢神宮のご加護によるものだ」と感銘を受け、「神風や御船寄すらむ沖津波頼めをかけし伊勢の浜辺に」と歌を詠んだ。この浜は「伊勢浜」と呼ばれていたが、この時から「神風ヶ浜」と呼ばれるようになった。

江戸時代の古地図には「前濱」と書かれていることから考えると、正式な地名はあくまで前浜であって、伊勢浜も神風ヶ浜も愛称のようなものだと思われる。今ではどちらの呼び方も耳にすることはないが、島人の伊勢神宮に対する崇敬の念を表した名前だ。

表紙の鳥瞰図ではもうひとつ、大きく描かれた「後村上天皇旧跡」にも目が留まる。これが、義良親王の行宮が置かれた東山である。初三郎の画法の特徴は、目立たせたい部分を極端にデフォルメすること。前浜から島の東端に聳える東山を眺めると、扇の要のような存在感と安定感があるが、初三郎はそれをさらに誇張しており、この史跡の重要性を最大限アピールしようと努めていることが窺える。

当時はそれほどの扱いだったのだが、現在発行されているパンフレットで東山や後村上天皇旧跡を紹介しているものはない。いったいどんなところなのだろうか。

東山は別名「城山」「古城山」とも呼ばれる。奈良時代、篠島王なる領主がここに居を構えたという伝説があり、また、鎌倉時代には室賀秋季がここに篠島城を築いたという。義良親王の行宮は、この城を直したものだ。鳥瞰図では、山頂が城の本丸のように平たく描かれ、また「篠島史蹟」では「千古の老松松風に嘯き殊に眺望に適し景色絶佳なり」と紹介されている。

標高四十一メートルの山頂へは、前浜の北のはずれから登り、松寿寺と旧篠島小学校校舎の前を通っておよそ五分で着く。そこは鳥瞰図や「篠島史蹟」の描写とはかな

今は昔の歴史の跡も、
皆言い知らぬなつかしさあり。
（吉田初三郎「南知多遊覧」絵に添えて」筆より）

り異なる空間だ。確かに山頂は広場のように平らだが、鬱蒼とした木々に覆われて薄暗く、木立に遮られて眺望はほとんどない。その片隅には、愛知県が大正四年（一九一五）に建立した「篠島聖蹟」の碑があるが、それよりも目を引くのはたくさんの石塔と中央に祀られた祠だ。史跡というよりは信仰の聖地で、異界めいた雰囲気も感じられる。

このような場所になったのは、大正時代にある修験者が、古くから山上に祀られていた水神天宮を本尊として吉祥院という寺院を開いたのが始まりで、いろいろな神々もここに集まり、いつしか山頂を独占する形になったらしい。とはいえ異端視されていたわけでもなく、祈祷や行事には島民も集まり、親しまれた存在だったという。やがて寺は絶えたが、山上は荒れ果てたり藪に埋もれたりせず、残された神々を信仰する人たちによって今も清浄な空間が保たれている。この少し不思議な場所も、神秘性をまとう篠島らしい空間と言えるのかもしれない。

篠島めぐりは次号も続く。

〈取材協力、資料提供〉石橋伊鶴さん／南知多町教育委員会
〈参考文献〉篠島史蹟（出村鋟／篠島史蹟復刻実行委員会）／知多半島篠島（河合いずみ）／しのじま（篠島郷土クラブ）／篠島シリーズ1 史蹟帝乃井（竹内和夫、篠島シリーズ刊行会）／
郷土研究会誌「みなみ」第八号所収「出村先生と篠島学校の最初」（折戸耐次）／南知多町誌 本文編／南知多町誌 資料編